

「シェンゲン協定域外」国への旅行

旧ソ連圏の入国管理

1989年から始まったソ連・東欧圏の体制転換によって、この地域への旅行の仕方も大きく変わった。とくに、2004年の中欧諸国のEU加盟後、西欧と中・東欧がパスポートコントロールなしで往来できるようになり、人と物の往来が活発になった。

旧ソ連諸国への旅行は事前のホテル予約がビザ取得の条件になっていたから、ソ連の国営旅行社を通さないと個人旅行はできなかった。中・東欧の国を含めて、旧ソ連圏は入国管理が統一化されていて、どの国を訪問しても同じ制服を着ていて、居丈高に入国・税関審査する係官の態度に憤慨したものだ。ハンガリーの入国管理官の横柄な態度はソ連諸国のそれと大差なかった。

体制転換後もこうした横柄な国境審査が続いた。ハンガリーでも、入国管理官がいくら外貨を持っているかを紙に書けと言って、紙切れと鉛筆を出すことが何度かあった。「ちゃんとした申告用紙をくれれば書く」と言ったら、「文句があるなら、後で議論するから、列の後ろに並び直せ」と答えるのが常だった。不満がある奴は冷遇してやるという態度が明々白々だった。また、ロシアへ出国する際に、税関官吏がいくら外貨を持っているかと聞き、さらに財布の中身を調べたこともある。ロシアの税関でこれをやられると、大概、別室に連れて行かれて数百ドルは引き抜かれるが、幸い、ハンガリーの税関はそこまでしなかった。しかし、口頭申告額と実際額が異なると面倒だ。銀行の引き出し証明書を出せという場合もある。クレジットカードが通用する時代に、たかが千ドル程度の現金所持に目を光らせるやり方に憤慨して、出張から戻った後、与党の国会議員を通して、大蔵大臣に質問状を送った。日本商工会と外務大臣との対話の際には、旧ソ連型の入国管理システムを止める意思はないのかと質問したこともある。

かくように、入国管理官や税関職員は権力を笠に着て、居丈高に振る舞うのが一般的だ。下級官吏はこうして自らの存在を誇示する。こういうところでは、袖の下が横行する。体制転換直後はどこもビザ取得のシステムが混乱していたから、空港や国境でビザを取るときには、パスポートに10ドル程度の札を挟んだり、向こうの言い値でビザ料金を払ったりしたものだ。

面白いことに、1990年代のロシアの空港の入国管理システムが年々改善され、木製の閉ざされたボックスからカラス張りのボックスに変わり、それがオープンデスクに変わった。終(しま)いには、窓口のガラスに「係官の要求に応じて、金品を提供しないように」という張り紙が出るようになった。まるで「勝手に餌を上げないでください」、という動物園の張り紙みたいで苦笑した。ただ、ロシアでは入国管理が透明化しても、外貨の申告や所持金額の間違ひがあると、税関係官が裏金を要求する慣行は長い間続いた。

EU内の自由移動とシェンゲン協定

もう旧ソ連諸国を旅することもないので、国境管理や税関の対応がどう変わったのか知らないが、旧ユーゴスラヴィアの一部の国（EU に加盟しているクロアチアとスロヴェニア以外のセルビア、マケドニア、コソヴォ、ボスニア＝ヘルツゴビナ、モンテネグロ）を除き、ヨーロッパの旧社会主義国は EU に加盟しているので、いったん EU 国に入国した後は、日本人の域内旅行はビザやパスポートコントロールなしで自由に移動できるようになった。

ところが、同じ EU 加盟国でも、自由移動を取り決めたシェンゲン協定の未加盟国（たとえば、イギリスやクロアチア、ブルガリア、ルーマニア）へ入国する場合、同じ EU 国同士の移動でも、形だけとはいえ、入国管理＝パスポートコントロールが実施される。また、EU 国と非 EU 国との間の出入国には、当然のことながら、厳格なパスポートコントロールがある。

EU 国外（あるいは EU 加盟国でもシェンゲン協定国外）からハンガリーへ到着した場合、ハンガリーで入国審査が行われる。空港の入国審査窓口の数が限られているので、審査を待つ長い行列ができ、入国審査を受けるまで 1 時間以上かかることも稀ではない。欧州旅行に際しては、最初にどこに入国するのかわかり、その後の移動の際のパスポートコントロールのチェックポイントが異なってくる。また、移動国がシェンゲン加盟国なのかどうかを調べておくことも重要だ。

クロアチア国境

個人旅行（乗用車での移動）と団体旅行（バスでの移動）でも、入国審査の扱いが異なる。シェンゲン協定外の国でも、ビザなし入国が認められている諸国での個人旅行者の入国は比較的短時間で済むが、バス旅行の場合には全員のパスポートのチェックがあるので、それなりの時間がかかる。順番待ちの行列がない場合でも、最低 30 分は見込んでおく必要がある。

この 4 月末、ミニバスでハンガリーからクロアチアの国境に到着した折、ブダペストから到着したクロアチアの国際長距離バス 1 台が待機していた。チェックポイントには二つの小さな事務所が隣り合わせで並んでいるが、人の気配が全くない。入国に関する情報揭示がまったくないので、入国審査がどう行われているのか見当もつかない。そのうち、係官が出てきて、国際長距離バス乗客のパスポートの束が運転手に返却されたが、発車する気配がない。長距離バスの乗客にビザ問題を抱えている者がいたのだ。ハンガリーへのシングルビザを持ち、ハンガリーからいったん出国してクロアチアへ旅行しようとしたが、クロアチアの入国ビザがないので、ハンガリーへ戻るように指示されたようだ。

2 名の旅行者がバスから降ろされ、長距離バスが発車し、我々のグループの審査になった。入出国の体制がどうなっているのか分からなかったが、ハンガリーの若い係官にパスポートの束を渡した。しばらくしてから、「ハンガリーの出国は済んだ」という。ところが、隣のクロアチアの事務所は、係官の交代時間なので交代要員が何時来るか、30 分ほどかかるかもしれないという。なんともものんびりした話だが、急かしてどうなることでもないから、

雑談しながらクロアチアの係官が到着するのを待った。

15分ほど待ってクロアチアの係官が来て、パスポートチェックが終わり、通行可能となった。この間、パスポートの本人確認はなく、バスの中の検査もなく、あっけなくクロアチアへ入国した。ビザが不要な国からの旅行者の扱いは簡便化されている。クロアチアもハンガリーと同様にEU加盟国だが、クロアチアはまだシェンゲン協定に参加していないので、ここで形だけの入国審査が実行されたのだ。

ドブロブニクからサラエヴォへ

今回の旅行はザグレブで1泊し、そこからスプリットを経由して、名勝地ドブロブニクで2泊するものだった。体制転換以後、クロアチアのアドリア海沿岸一帯は一大リゾート地に発展し、ドブロブニクには高級ホテルが乱立している。5月初めというのに、ドブロブニクの旧市街には観光客が溢れている。

帰路はドブロブニクからボスニア＝ヘルツゴビナの首都サラエヴォを通して、ハンガリー南部の赤ワインの産地、ヴィッラーニへの移動を計画した。この行程の道路事情や国境管理の情報がなく、ぶっつけ本番だった。ドブロブニクからサラエヴォへは山岳地帯を通るおよそ400kmの道のりである。少なくとも6時間を見込んでおかなければならない。ドブロブニクを出て間もなく、クロアチアとボスニア＝ヘルツゴビナ国境に着いた。ここで要求されたのが、Inter Busという緑色の旅程申告用紙だ。ハンガリーからクロアチアへはいる時には要求されなかった書類だが、運転手が記入を忘れていた。そこで、急いで旅程と乗客名簿を作成し、パスポートを提出した。ボスニア側（とおぼしき）の係官は、クロアチア入国の際に用意しておくものだと言っていたが、運転手が平身低頭で見逃してもらった。近くで観察していたら、クロアチアの係官は、古いスキャナーでパスポートの顔写真が張ってあるページをスキャンしていた。

この国境ではクロアチアとボスニア＝ヘルツゴビナの出入国管理が二つの小さなボックスで行われていたが、何の表示もないので、どちらがどの国の事務所が判別できなかった。

ここでも、パスポートと本人確認はなく、パスポートをスキャンし、Inter Bus用紙への押印が終わって、通過が許可された。この間、およそ30～40分の時間であった。

ユーゴ内戦の残骸が残る山道を5時間近く走り、サラエヴォに到着した。ユーゴ内戦から25年経過して、かなりの程度まで戦災の修復が終わっているが、手つかずの建物の壁には銃弾・砲弾の跡が生々しく残っている。昼食を早々と済ませ、ハンガリーへ向けて出発した。赤ワイン産地ヴィッラーニへ入る国境は夜の8時で閉まる。まだ400kmの行程が残っている。これから5時間30分でそこへ到着しなければならない。

サラエヴォから再びクロアチア国境に向けて走る道路は良く整備されていた。ここは高速道路が建設されており、スムーズに移動できた。しかし、再び、ボスニア＝ヘルツゴビナ国境を通過しなければならない。ここではバスから全員がおろされ、初めてパスポートと本人確認が行われた。そのあとに、国境の緩衝地帯をしばらく走って、今度はクロアチアの入

国管理の審査となった。ここもパスポートと本人確認が行われた。幸い、バス路線には審査待機するバスがおらず、比較的早く通過できたが、自由移動が制限されている EU 外・シェンゲン協定外の諸国の移動の不自由さを実感せざるを得なかった。

クロアチアから再びハンガリーへ

クロアチアへ入国した後は、ハンガリー国境に向けて、トイレ休憩もなしに急いだ。クロアチアとハンガリー国境に到着したのは国境が閉まる 10 分前だった。もし国境が閉まってしまえば、翌朝までバスに泊まるか、幹線道路の国境へ移動しなければならない。しかし、とにかく何とか間に合った。

この国境には両国の入国管理事務所が併設されていて、それぞれパスポートと本人確認が行われた。クロアチアの窓口並び、それが終わるとハンガリーの窓口並び。判を押ししてもらって、バスに乗り込むだけだから、20 分程度で出入国が終わった。後はホテルに連絡して、到着時刻を伝えるだけだった。

それにしても、ドブロブニクからハンガリーへ戻る行程は、見るところもほとんどなく、入出国管理の煩雑さだけが印象に残る旅だった。旅行を計画するにあたって、ハンガリーのバス旅行会社にオーダーメイドのバス旅行を打診したが、どこも引き受けてくれなかった。ドブロブニクからハンガリーへ戻る行程を体験してみると、こういう周回旅行は旅行会社にとってメリットがないことが分かった。だから、個人でバスを手配し、自分たちでホテルを手配するしかなかった。

久しぶりに旧社会主義国の入出国管理を体験し、旧体制時代の経験を思いだした。国境通過の面倒さや、入出国官吏の行動様式に、一昔前の記憶が蘇った。時折、旅行者を叱責するような声も聞いたが、昔ほど居丈高ではなく、仕事にも力が入っていない様子だった。クロアチアの入出国で、本人確認があったりなかったり、ビザが不要な外国人の扱いのシステムが統一されていない。たんにルーティン業務をやるだけという態度だった。

レンタカーでも個人の乗用車でも、ボスニア＝ヘルツゴビナを旅行する場合には、欧州の車両保険が適用されないことに注意しなければならない。ここで事故にあうと保証がないし、車両移動もままならない。山岳地帯で車が止まってしまうと、脱出に相当長い時間が必要になる。十分に気を付ける必要がある。